

鑑賞を柱にした学級経営 ～「鑑賞」の教育的価値～



2006年度担任した5年生のクラスにおいて2年間「鑑賞」を柱にした学級経営を試みた。答えがなく、様々な価値観を共有できる「鑑賞」が学級を運営する上で有用と考えたからである。当初の子どもたちは日々の学習や行事に追われ、また「自分と対峙する力」「発言する力」「共感する力」に課題もあり、クラスの活動が停滞していた。

実践では図工の時間以外に「鑑賞の時間」を週に1時間特設し、「みる・はなす・きく・かかんがえる・つたえる」ことを大切に学習した。その結果、子どもたちは作品をみて感じたことを自由に言葉に表し、仲間の発言を聞き、自分と仲間の感じたことを照らし合わせながら考えを深め、自分なりの見方を伝えることができるようになった。また、鑑賞への関心が高まるにつれ、子どもたちは学校に隣接する『神奈川県立近代美術館鎌倉』を中心に何度も足を運ぶようになった。学校とは異なる環境下での実作品との対峙は、子どもたちに特別な緊張感の中で“ひとりになれる時間”をもたらした。そこに求められた答えはなく、安心して自分と対峙して考えを深めることができた。自分の考えをもつことで自信をもつ。その自信は仲間との差異を否定するのではなく、共感することにつながった。共感することでさらに自分の考えが広がり、対等に意見交換する姿も出てきた。

1年後には「鑑賞」の効果が明確に表れた。日々の授業や行事においてクラスの活動が円滑に運ぶようになったのである。それは、答えは一つではないという認識で話し合いが進められるようになったからであり、一人ひとりが自分の考えをもって仲間と共感しながら自分たちで新しい価値を見出すことが出来るようになったからである。

図工の時間に「鑑賞」を表現から独立して行うことについては様々な意見があるが、私はあえて必要だと考える。表現と一体となった鑑賞や児童の作品鑑賞では、真に自分と対峙することは難しい。子どもたちにとって美術館の空気や本物の作品がもつ力は大きいと実感する。学校生活の中で自分自身をもう一度顧みる時間や仲間と共感する時間をつくるのに美術館での「鑑賞」はとても重要なことであると考えます。

私にとっての「鑑賞」の教育的価値とは、答えの出ない不確かな自身との対峙の中で、自分を起点に他人と関わりつつ意味を見出していく創造的な行為を子どもの感覚に伝えることである。

「鑑賞」を続けることの必要性



子どもたちには、多様な「人・もの・こと」からその価値や美しさをみつけつつ、より豊かに発想・表現していく人になってほしいと願っている。そのためには物事を表面から判断するのではなく、それらとじっくり向き合いながら内面にもつ「真の価値」を見極める力を育むことも大切である。これまで「みる・はなす・きく・かんがえる・つたえる」ことを基軸とした「鑑賞」を柱に学級づくりを進めてきたが、それは「鑑賞」を繰り返すことでじっくりと作品と向き合い、仲間と様々な価値観を共有しながら作品の価値や美しさをみつけるトレーニングになると考えたからである。

実際に多くの子どもが2年間の美術館との関わりの中で「発言力」「様々な価値観を共感的に受け入れる力」「苦手なことにもじっくり向き合いそのよさをみつける力」がついたとふりかえっているが、2年間継続した仲間とともに作品をよくみて話し合い、お互いの価値観を共有するという「みる・はなす・きく・かんがえる・つたえる」鑑賞が学校生活の中に多少なりとも浸透した結果だと思う。この流れがさらに彼らの将来にも広がっていくことを期待している。

横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校
高松 智行